

す。そのような分科会を企画される方は、少なくともその御意向だけでも、この秋には、本学会事務局に御通知下さい。

但し、企画実現の為には、立案と同時に、その分科会の責任者は、次の仕事も並行してスタートする必要があります。

- ① 分科会のテーマ・名称
 - ② フランス側責任者の決定 「その方にはフランス代表団を組織して頂きます。」
 - ③ 期間〔普通、一週間前後〕 しかし、開催と閉会の日時につきましては、日仏会館における合同の開会式や閉会式やレセプションもあることです。分科会だけで独自に決めることは難しいでしょう。
 - ④ 会場―東京でしなければならぬわけではありませんので、企画に合った場所を考えられます。
 - ⑤ 日本側参加者数の把握
 - ⑥ フランス側来会者数の把握
往復旅費と、日本での会議期間の滞在費の半額は、原則としては、フランス側の負担。従って、日本側はその他の諸経費を、フランス側参加者の数と、「これは現実には、開催間際まで確定は難しいのですが」日本側の参加見込み数に従って用意しておかなければなりません。
- 各分科会は、いわば独立採算制で動くことになりまますから、その経費の調達は、その分科会責任者〔とそこへの参加日本人〕

の仕事になります。

発表をしないオブザーバーに関する諸経費につきましては、昨年のパリのコロックでの経験からしますと、ケース・バイ・ケースで判断するしかなさそうです。

- ⑦ 会議事録の出版計画
 - ⑧ 必要があれば、通訳の確保
去年のコロックでの経験から、以上の用件を申し上げましたが、分科会責任者はこれらについて、来春までに見直しをお立ての上、本学会事務局に御通知下さい。
一分科会しか出来なかった場合はさして問題はありませんが、複数の場合には、評議員会或いは幹事会を開いて、「東洋学」と言う大きな部門の中で、各分科会がそれぞれ旨く機能するように協議することになりましょう。
 - ⑨ 役員改選の件については、（これも前掲文章と一緒にすでに通知済みであるが）全員留任と決まり、新らしく評議員に、森安孝夫、山中一郎、羽田正の三氏が推荐され、承認された（羽田正氏は幹事も兼ねる）。
- 本学会では、会則第八条によって、評議員会のうちから、顧問、会長その他の役員全てが選ばれることになっている。しかし、評議員については、第七条に「本会は評議員会によって運営され、評議員は会員総会により選出される。評議員の任期は二年とするが、再任を妨げ

ない。」とだけあって、その選出方法は明記されていないし、内規もない。

そこで、今回役員改選の時期になり、その手続きが問題になり、評議員会と会員総会との両方で議されたが、結論は出なかったので、一応今回は決定は見送り、事務局で継続審議して来春の総会で改めて議することになった。

本学会の会則は、日仏会館の他の関連学会の会則を参考にして、再発足の準備会で作られたものであって、実際は、厳密に言い出したら議論は果てしないことになって、反って動きがとれなくなる恐れがある。本学会の成立当初の事情から考えても、余り厳密に選挙規定など作らない方がよいのではないか、その必要は今のところいらぬのではないか、という発言もあった。(結論については、次号の第二回会員総会の報告に記す)

③ 会務報告

一、昭和六〇年度(昭和六〇年四月一日～昭和六一年三月三十一日)

会計決算報告

フランス政府の補助金五万円が、本年度分として、十月二十九日付で本学会に支給された。フランス政府ならびに日仏会館に謝意を表するものである。

日仏東洋学会昭和60年度〈昭和60年4月1日～昭和61年3月31日〉会計決算報告

収	入				
	普通会員会費〈54名分〉		162,000		
	利息		1,353		
	繰越金		48,610		
	日仏会館より補助金		50,000		
合	計		261,963		
支	出				
印	刷	費	121,200		
	内訳①『学会通信』第4号製作費	50,000			
	②『学会通信』第5号製作費	70,000			
	③ハガキ印刷代	1,200			
通	信	費	60,600		
	内訳①『学会通信』第4号発送費	17,000			
	②S60.6.7.総会案内往復ハガキ代	8,800			
	③S61.4.7.総会案内往復ハガキ代	8,800			
	④ガラ発送関係切手代	2,000			
	⑤『学会通信』第5号発送費	24,000			
会	議	費	10,500		
消	耗	品	費(封筒, 印章, コピー, ネームバッジ)	11,060	
支	払	報	酬	費	6,000
合	計		209,360		

総収入－総支出＝261,963－209,360＝52,603

昭和60年度残金52,603円は、昭和61年度への繰越金とする。

上記の如く相違ありません。

昭和61年4月2日

日仏東洋学会会計監事 池田 温印
日仏東洋学会会計監事 原 實印

④ その他

学会事務局の件が諮られた。前述の第五回日仏コロックの準備についての連絡文と一緒に、この件もすでに四月中に全会員に通知済みで

あるが、記録としてここに再録する。

事務局移転の件が議題にのぼり、先ずその理由が次のように説明されました。

一、日仏会館のフワイエ室の一隅に、日仏会館関連学会の事務室があります。そこで、学会宛の郵便物や通知状が他の学会のと混じってしまふことが、これまで何回かありました。その結果、失くなってしまうという事故までには未だ到ってはいませんが、今後のことは判りません。実は、会員がサロンとして使う時のために、会員有志が金を出しあつてコーヒーや紅茶類を買い、ちゃんと学会の名前を書いて部屋に置いていたものが、今度の総会の時に行つて見ますと、あとかたもなく消えてしまつていました。会費は振り替へで来ますから、事故は殆ど考えられませんが、用心にこしたことはありません。また、常時「事務局員が」詰めていくわけではありませんので、返信を必要とする手紙類に間に合わない場合も出て来ます。

二、日仏会館の関連学会は日仏会館内に事務局を置かねばならないかのように、これまでは思い込んでいたのですが、必ずしもそうではないようです。

右の二理由で、事務局は主幹「事務局長」のところに置くのが宜しいであろう、ということになり、次の住所に移転が決定されました。

①一六二 東京都新宿区戸山一―二四―一

早稲田大学文学部 八階 福井文雅研究室内

☎ (〇三)二〇三―四一―一 内線二四八二(研究室)

研究室が出ない場合は、内線二二六一の教員室受付に

御伝言下さい。「福井姓の教員が三人いますから御注意!」

郵便振替口座番号 東京一―一三四五八四

但し、事務局の設置期間は、役員改選の予定される再来年まで、つまり、この四月から昭和六十三(一九八八)年三月までのことで、それ以後は別に移るようになります。

〔但し、右の通知を発送したあとで気付いたのであるが、今回の総会では、役員改選はされずにただ見送られただけのことなので、事務局の設置期間は右記年月よりも短かくても良いはずであった。なお、事務局が早大に移るに伴ない、「全国的な規模を有する学会が、本大に事務局をおいて活動する場合、事務経費および理事会費の一部を補助します。ただし、同一学会に対する補助は、年一回を限度とします。』という早大の規定によつて、補助金を申請した結果、五万円の補助金が交付された。言うまでもなく、これは別会計扱いとなる〕

会員総会后、五―七時にかけて座談会が開かれた。これは前回の京都での総会・座談会に続くものであるので、大地原豊教授が進行役に當つた。次に、氏による要約記事を掲げる。

座談会「東洋学各分野における戦後

日仏交流の歩み」——第二回——

(敬称略)

1. 「ルロワログラン教授と日本」(山中一郎、福井文雅、ほか)
——最近に訃報を聞く André LEROI-GOURHAN 教授は、69〜82年の間コレージュ・ド・フランスにあって「先史学」を講じ、正規の学歴なくして新たな学術分野を確立し得た独創に名高い。但し、このような研究志向の発起点が、戦前末期(38〜39年)における氏の滞日にあった事実は、案外わが国では知られていないのでなからうか。若き独学者として氏は、東洋語学校にて中国語を履修する間、とくにM・グラネに私淑した由であって、これが氏の来日に直接の契機をなしたことは確実であろう。(氏の所論への言及が、近年においても、J・ジェルネ教授その他の中国学研究者の間で、際立って多いことを併せ思われたい。)しかし乍ら滞日間の氏は、関西日仏学館でラテン語を教えたという外、(時に憲兵から嫌疑を受けつつも)北海道・千島に単独行を試み、主としてアイヌの現地調査に専念したのであった。大戦勃発に伴い帰仏、敗戦の軍務を経たのち、占領下パリの人類学博物館に迎えられて学的地歩を得たのは、この先き立つアイヌ踏査の実績によってなのである。

2. 「戦前に接し得た二大家、ペリオとセデス」(山本達郎)——

35年、東方文化学院東京研究所の助手であった私は、P・ペリオの研究所来訪を迎えて碩学の博学多識に驚倒を禁じ得なかった。書庫に入ってペリオは、来訪者一般が先ず自己の専攻に関係の書架へと向うのに反し、書架の一本に立ち止りつつ興味深い所蔵本を次々と引き出しては開き見るのであったが、その都度たちまち、同行の石田幹之助先生との間で、当の書籍をめぐる丁々発止の学術談が英語で交わされ、いずれ劣らぬ学殖の程に若年の私は只々感動を極めたのである。——翌36年、私は仏印視察の出張を命ぜられ、フランス極東学院の活動を親しく現地を目撃することができた。先年に松本信広氏が親交を結んでおられたE・ガスパルドーヌは既に本国へ戻り、したがって私には専らG・セデス院長の印象が強かった。ハノイの暑さを麻の背広の正装で一貫する端然とした風姿は、一見ペリオの談論風発とは対蹠的な謹厳そのものと映じつつも、偶々他者の業績の批判に及ぶセデスの語気は実に卒直かつ断定的で、満々たる自信を窺わせるものがあった。ライフ・ワークとなる『カンボジャ碑文』(8巻)の初巻が刊行されたのは、翌37年であることを思われたい。

3. 「戦後交流の再開まで」(大地原豊、羽田明、ほか)——49年秋、「文化使節」R・グルッセ(ギメ博物館長、フランス学士院会員)の来日は、戦後の混沌に射し入る鮮烈な曙光の如くであった。事実、翌50年にはフランス政府給費生の渡仏が再開(秋山光和氏を含む六名)、続く51年には同給費生の公募・試験選抜が12年ぶりに復活した。この

ころ日仏会館には、V・エリセエフ、R・シフェールらの諸氏が既に「研究員」として来任し、相い次いで「館長代理」を兼務する一方、日仏医科会など二三の関連学会では、戦後再興の気運が進展しつつあった。——日仏会館の正常化を画したのは54年春L・ルヌー館長の着任であるが、この入選に関しては、国交回復当初のフランス大使として旧友D・レヴィ(S・レヴィの次男)が駐日、という事実が大きく介在したに違いない。以後二年間のルヌー館長期には、概ね相即してB・フランク氏の「研究員」在任があり、後にはM・ソワミエ氏の着任が見られて、東洋学における戦後の日仏交流は、インド学・日本学・中国学・チベット学の順で具体化の局面に達した。我々の「日仏東洋学会」自体、その前史を同じ時期に負うものであって、故・石田幹之助先生の唱導下に設立された同学会は、ルヌー館長期と重なる両三年を、フランス語による『日本東洋学文献要目——一九五五・五六年』(二冊、58・60年刊)の作成に傾注したのであった。

4. 「インド学の場合」(大地原豊)——典型的な戦中派の復員学生として、闇雲に留学生試験への出願を重ねた私は、事フランスに関してN・スチュパク女史への師事を、(女史の占領下パリでの悲劇的な逝去を知らず)大真面目に希望する程の田舎者であった。にも拘わらず、51~54年を米・仏・印に送ることが許された上、この間に生じた僥倖の相乗積から、帰朝後は日仏会館にルヌー館長を訪ねてはインド土着文学への手引きを忝くし、生涯唯一の専攻主題を見出すこ

ととなった。更に想起して感動に耐えぬのは、故・辻直四郎先生および原実氏に御面識を得たのも、当時ルヌー館長の介在があったればこそという事実なのである。——そもそも東アジアとは無縁のルヌー教授を日本へと誘ったのは、レヴィ大使からの要請に加えて、52年に公刊を見た辻『ブライフマナとシュラウタストラの関係』に対する畏敬であったと信ぜられる。かくて両教授の親交がいよいよ緊密化する間、辻文学部長に請われて東大に出講したルヌー館長の、注目を惹いた受講生が(ハーヴァード留学前の)原氏なのである。——関連分野でのフランス留学は、60年の前後に(パリへの到着順に書けば)山口瑞鳳、福井文雅、川勝義雄、定方晟の四氏があり、更に70年代以降は御牧克己氏ほか、パリ第三大学の学位取得者のみでも六名を教えるが、この間の経緯は他日の談話に委ねたい。

※ 座談会のあと、近くのカフェ・バー「アクシス」で会員懇親会。山本名誉会長、大地原教授等、約二〇名近くが、ビール、ワインで二時間近く楽しい時を過した。

〔以上で、今年度の第一回総会の報告終り〕

会員消息

住所変更

赤松明彦、池田温、岡山隆、羽田正、前田繁樹、三崎良周、明神洋、森安孝夫（これらの諸氏については、後記の「会員自己紹介」の欄を見らるたい）

昭和六十一年叙勲・受賞

勲二等瑞宝章 ベルナール・フランク（元日仏会館学長）

勲三等瑞宝章 バディム・エリセエフ（国立ギメ美術館館長）

勲三等瑞宝章 平川 彰（日本印度学仏教学会・理事長）

文化功労者 山本達郎本学会名誉会長

○ 小名康之氏は、四月から約一年間、青山学院大学の在外研究員として、フランスの大学、図書館、文書館をおとずれ、十七世紀後半の東インド会社関係の史料調査をして無事帰国された。

○ 新田大作氏は、八月十七日、脳血栓で急逝された。享年六十二歳。

八月末のハンブルクでの国際東洋学会議 ICANAS に出席する予定で、そこで発表するための原稿を執筆中、自宅で倒れた。日仏東洋学会としても弔意を表した。

○ 中谷英明氏は、ストラスブール大学での二年間の客員のつとめを終えて、昭和六一年秋に帰国。

○ 鈴木まどか氏は、昭和六二年三月まで在仏。

○ 興膳宏氏は、フランス国立高等研究院の招きで、「中国文学」について講義のため、昭和六一年秋～六二年秋まで滞仏。

○ 原實氏は、オックスフォード大学客員教授として今秋まで滞英。

○ 鈴木まどか ㊦二七三 船橋市丸山五―三四―一

㊦ 0474-39-0114

○ 和田久徳 現住所の番地二三三四のあとに「一」を附ける。

改姓

太田美香→澤 美香（現住所も、六月から次に変更）——㊦二二

一 横浜市神奈川区白楽一〇三 ハイハウス白楽一〇三号

新入会員

今枝二郎、宮沢正順、中村璋八（この諸氏については、後記の「会員自己紹介」を参照）

○ 川本邦衛 KAWAMOTO, Kunie ㊦一九八 青梅市長淵一―九

一九 TEL 0428-22-3219 慶応大学教授 ヴェトナム史

○ 栗原圭介 KURIHARA, Keisuke ㊦一八五 国分寺市東元町一
一〇―十三 TEL 0423-25-1278 大東文化大学文学部講師 中

国哲学

○ 湯山 明 YUYAMA, Akira ㊦一五〇 渋谷区道玄板一―二一

一六 東急スカイライン 六二二号 TEL 03-476-3625 国際仏教学

研究所所長 (☎一〇五 港区虎ノ門五―三―二三 国際仏教学研究
所 TEL 03-434-6953) インド哲学

〔東京都千代田区紀尾井町七

―一〕

電 : 03-238-3697・3696

(退会)―加地伸行、谷田孝之、村山郁子)

学会活動

これについては、そのたびごとに「臨時の通知」として、短信または葉書で全会員に伝達してきたので、ここではそれを再録して記録にとどめることにする。

残暑御見舞申し上げます。

『日仏東洋学会通信』の第五号と「学会事務局の移転と、第五回日仏コロックの準備について」という御通知とを、既に御入手のことと存じます。万が一、未着の方がございましたならば、至急、事務局まで御連絡下さい。

只今は、皆様から寄せられました自己紹介アンケートを整理し、それを中心に『通信』の第六号を編集集中ですが、今日は急ぎの用件をお伝え致します。

会合

一、日仏セミナー「キリスト教とアジア社会―方法的アプローチ」

九月二十九日～十月三日 上智大学 (アジア文化研究所

―所長・石沢良昭)

三、十月上旬に、『法宝義林』〔京都市上京区 相国寺林光院内〕の記

日本側参加者〔予定〕：

石沢良昭〔セミナー責任者〕 石井米雄 遠藤周作 姜在彦 坪井善明〔連絡責任者〕 森 幹男 矢沢利彦 柳瀬睦男 山本達郎 山本澄子

フランス側参加者〔予定〕：

Georges Boudarel Eugene Denis Alain Forest
Jacques Gernet Léon Vandermersch

オブザーバーでの出席希望者は、石沢教授宛で御連絡下さい。

二、ジャック・ジュールネ〔コレージュ・ド・フランス教授〕講演会

「国家について―十七世紀のフランスと中国との比較」

Jacques Gernet, Professeur au Collège de France

“ A propos de l'Etat : comparaison entre la Chine et

l'Europe au XVIIème siècle ”

十月三日〔金〕十八時～二十時 東京・日仏会館・

二階会議室

日仏会館主催、日仏東洋学会共催

〔通訳付き、入場無料〕

念行事が、法宝義林研究所主催、日仏東洋学会・関西支部共催で催される予定です。

九月二十四日

学会事務局

会費納入についてお願い：

失礼ながら、振り替え用紙を同封させて頂きました。会費は年間三千元です。これと行き違いにお振り込み頂いております場合には、失礼の段、何卒お許し下さい。どうぞ宜しくお願い致します。

〔八月末 発送〕

略啓

ジェルネ教授の講演会の機会に、臨時評議員会を開くことになりました。急なことで、誠に恐縮ですが、次の案件ですので、出来る限り御出席下さい。御欠席の場合には、お考えを返信用葉書でお知らせ下さらば幸いです。

月日 十月三日〔金〕五時～六時

会場 日仏会館一階・フワイエ 電・(03)293-6310

議題一、一九八八年秋の第五回コロック参加の件

〔これまで機会ある毎にお諮りしてきた件ですが、参加希望の方は、前回お配りした要領を御参考の上、お申し出下さい。〕

二、『日仏東洋学会通信』第六号編集の件

三、その他

とり急ぎ、御連絡のみにて。

草々

右の他にも、外部からの要請によって、次のような会合・催しにも本学会は参加した。

◎ 八月二日から二九日まで、第五二回 IFLA (国際図書館連盟) 東京大会が開催された時、それと平行して、参加者の宿舎であるホテル・ニューオータニで「国際図書館情報総合展」が開かれ、梅の間に設けられた国際交流コーナーに、『日仏東洋学会通信』第一号～第五号、『日仏東洋学会会員名簿』が展示された。

◎ 十二月三日、六時～八時にかけて、日仏会館会議室で「日仏関連学会連絡会」が開かれ、本学会からは、福井事務局長と山田利明会員とが出席した。二〇の関連学会と学術委員会からの七委員、ペンシオネール(日仏会館内研究員)六名、フランス事務所からの川上恭子、林春郎の二氏が集合した。「協議事項概要」が一九八七年一月二〇日付で本学会あてに届いたので、次に転記する。〔 〕は註記。

1 学者交換事業〔この事業については、これまでの『日仏東洋学会通信』で度々御連絡して来たことですが、新入会員の方々の為にも、改めて再録します。〕

学会通信にもあるように、会館のこの事業には、次のA・Bがある。

A…フランス政府派遣学術使節(フランス事務所扱い)

B…文部省補助金によるもの(会館事務局扱い)

Aはフランス学者の来日のみに関係するが、Bには日本側の学

者・研究者の渡仏と、フランス側からの来日と両方がある。「日仏会館の」学会通信No.2に一九八六年度の規則があるが、一九八七年度もそれによることとした。ただし、Aの一九八八年度の年間スケジュールは、今までより早めて次のようにする予定である。(来日期間：一九八八、一～二月末)

一九八七年 七月初 学会へ希望募集発送

九月中旬 希望提出締切

一月末 候補内定

五月 候補決定

Bの一九八七年度のスケジュールは前年通りとする。(実施期間：一九八七、四～一九八八、三)

一九八七年 一月 学会へ希望募集通知

三月中旬 同提出締切

四月 候補決定

Aについては、上のようにすれば希望募集の発送から提出締切までの間に二ヵ月余の時間ができるが、それでもフランス学者来日の交渉をその間だけにすることは一般に困難と思われる。そのような交渉はふだんから心掛けておいていただけねばならない。

一九八六年度は、この制度で次の学者交換が行われた。

A Jean-Marie Caille (医学)

Michele Kedinger (生物学)

Maurice Kessel (音響工学)

Henri Farrugio (海洋学)

B (来日) Michel Waldschmidt (数学)

François Reiner (図書館学)

Marc Augé (人類学)

(渡仏) 石堂常世 (教育学)

島崎邦彦 (地震学)

久重忠夫 (哲学)

大津真作 (社会学)

II 第五回日仏学術シンポジウム(コロック)

第四回コロックは一九八五年秋8部門が参加して、フランスで開かれた。その公式の報告は近刊の日仏文化特別号に出るが、非公式の報告は「日仏会館の」学会通信No.2に出ている。次回は一九八八年秋日本で行われる。参加希望部門は、後にお送りする申請用紙により、一九八七年三月末までに学術委員会に申請していただきたい。

なお、ベルク学長より各学会へこのコロックについてのアンケートが送られたが、懇親会席上あるいは他の機会にでも、学長に直接お答えいただきたい。

III 渋沢・クロードル賞

一九八六年度は Louis Vuitton 社からの寄付があったので日本側では特別賞を出すことができ、滝沢正氏(フランス行政法)、塩川徹也氏(パスカルと奇蹟)の両氏が受賞され、お二人とも渡仏された。フランス側では Pascal Griollet 氏(日本の国字改革問題)が受賞さ

れ、近々来日される予定である。

一九八七年度も前年度同様二月中に毎日新聞に募集が公表される予定である。ただし、年令制限が今まで四〇才であったのが四二才になる。よい候補の推薦をお願いする。

IV 日仏共同研究事業助成計画

日仏会館の寄付行為には、会館の目的は、「日仏両国の協力によって、相互の文化研究を行い交流を図り」とされており、会館は「研究員数名を置く」こともできるようになっている。今までもその目的に従って会館の事業を進めてきたが、日仏両国の研究者が協力してひとつのテーマを追求することは組織的に行われてはいなかった。「研究員」というのも置かれたことがなかった。（これはパンシオネールとは別である。）来年度から、関連学会を基盤に少なくとも日本人二名、フランス人一名を含む陣容で、一定の目的をもって研究し、長くても三年以内にはまとめて成果を発表する計画を立てていただき、よい計画に対しては一件五〇万円以内、一年に二件までは会館で援助できるように来年度の予算を立てたい。それにつき学会でも協力が得られようかとの質問に対し、好意的な反応があった。一月中旬に申請用紙を各学会に配布し、六月末に申請を締切り、七月の学術委員会での件につき審議することとなった。

V その他

(i) 文化講座

現在主として歴史学会の方をお願いし、「新しい歴史」を主題に開

講しており、定員以上の聴講申込があった。（毎週一回ずつ五回、今回はセミナー形式、最終回は四人の講師との共同討議。）今年度は一回だけとなったが、来年度はなるべく春秋二回開催したい。

(ii) シンポジウム「都市に個性を」

地理学会等の方と協力し、フランス大使館、読売新聞社との共催で、一九八七年五月末、この日仏シンポジウムを日本で開くこととなっている。五月二七～二九日、最初の二日間は公開で、それぞれ両国の作家、建築家による討論、三日目は非公開で都市社会学等の専門家による討論会とする。ほぼ同時期にフランス近代建築の展覧会等も開かれる予定である。

(iii) Foyer「ファイエール会員憩いの場」の利用

Foyer は学会によって利用されることも多くなってきているが、もっと利用されてよい。今までの有料利用制度は、来年一月から無料制にするので（フランス事務所に連絡の上）一層利用されたい。

(iv) テレックス、ファックスの設置

フランス事務所に次の番号のテレックス、ファックスが設けられたので、来日フランス学長との交渉のときなど利用することができる。

テレックス 二二二三四五四 HAIFRA J

ファックス 〇三二九一八三六〇

(v) 「日仏文化」について

「日仏文化」は会館の機関誌で年一～二回刊行され、会員に無料配布される。会館行事の報告のほか、来日フランス人学者の会館におけ

る講演の仏文テキストの発表を、主要な内容としているが、邦文の部
分もあり、読み易いところを多くするためその部分を拡張することが
望まれる。学会でも協力していただければありがたい。

(vi) 会館の組織と学会との関係について

会館にフランス事務所と日本側事務局がそれぞれ三階と二階にある
こと、学会の会員は総数五〇〇〇人ほどになるのに会館の会員は一〇
〇〇人ほどなので、学会の会員であっても会館の会員でない人が多い
ことなど、よく知られているはずであるが、忘れられていることも多
いようである。会館の立場からは、学会の会員はみな会館の会員にも
なっていたきたいが、それは実際上困難であるにしても、主要な方
には会館にも入っていただき、一般の方も連帯感をもって協力して
いただければありがたい。

一九八六年度第二回会員総会について

この件については、「昭和六一年度会計報告」の詳細と共に、次号
で報告するが、八六年度中に開催された総会であるので、総会開催の
通知状を次に転載しておく。

間近に春が感じられるようになりました今日この頃、皆様には益々
お元気にお過ごしのことと存じます。

さて、次のように定期総会を開きますので、今月末迄にどうぞ御返

信下さい。

早大内に事務局のある学会には、事務費と会合費とに、大学から一
定金額内で補助金が出るようになっていきます。ただし、その為には会
場は早大の施設を利用する必要があり、従って、今回の会場はこれま
でとは変わりましたので、充分御留意下さい。

会場 早稲田大学・大隈会館〔校友会館とも言います〕

―後註☆参照―

電話(〇三)二〇三―四三六一(代)

日時 三月十一日(水) ①役員(評議員)会 四―五時

一階(受付裏手)和室

②会員総会 五―六時

三階 二号 洋室

③懇親会 六―八時 同右室

議題 ① 一九八八年の第五回日仏コロック参加の件

昨年四月に全会員に出しました『学会事務局の移転と、第五
回日仏コロックの準備について』の中に、参加希望の方は
「少なくともその御意向だけでも、この秋には、本学会事務
局に御通知下さい。」と書き、その分科会の責任者が今春迄
にしておかねばならない具体的な企画の立案もお願いしてお
きました。

その結果、次の二件の申し出がありました。

A. 「日・中の宗教文化の交流」〔主会場―東京近辺〕

代表―酒井忠夫 責任者―福井文雅

〔関西地区世話人―坂出祥伸〕

B. 「東洋学諸分野における中央アジア出土文書の研究」

〔会場―京都〕

代表―羽田 明 責任者―大地原豊

昨年連絡状には、総会での発言を要約して――

一分科会しか出来なかった場合はさして問題はありませんが、複数の場合には、評議員会或いは幹事会を開いて、「東洋学」と言う大きな部門の中で、各分科会がそれぞれ旨く機能するように協議することになりましょう。――
と前もって書いておきましたが、十一日には、その線に沿って日程などについて具体的な話が出るでしょう。詳しくはその連絡状に既に書いてありますので、改めて予めご覧頂ければ幸いです。

当日御欠席の会員の為に予め申し上げておきますならば、その後の手順としましては、その結果を日仏東洋学会の名で一括して日仏会館學術委員会に申請します。日仏会館から「参加申請書」なる書類が各学会宛に一月末に届きましたが、そこに、部門名から参加予定者、資金調達等、今後の予定を書き込む欄があり、それを三月末までに日仏会館學術委員会に届けることになっています。それからいよいよ、「他学会と協力しつつ」コロック開催の準備が始まることとなります。

② 会計報告、その他

付記 急ぎ御通知すべき事や講演会開催等につきましては、その都度、

連絡状を発送して来ましたが、『学会通信』につきましては、学会事務局の局員三名が昨年中はそれぞれの仕事に忙殺され、原稿は揃えたものの、発刊は大幅に遅れてしまいました。印刷所との関係もありますが、三月中には第六・七合併号としてお届けできれば、と思っております。記事をお寄せ下さった方々には、何卒御容赦下さい。

従って、会員自己紹介の訂正或いは新規申し込みはまだ間に合います。

〔☆〕大隈会館は早大・大隈講堂の左隣奥、庭園内にあります。そこへは、

地下鉄・東西線「早稲田」駅
国電「高田馬場」下車、早大行きスクール・バス終点―
都バス「上野公園」(或いは、九段下) 〳小滝橋車庫―
路線「早稲田」

から徒歩
数分

※ 閉会後の六時頃から、会員懇親のカクテル・パーティを同じ会場で開きます。好評の座談会は、今回は見送ります。

一九八七年二月二十日

―学会事務局―

会員自己紹介

昭和六〇年（一九八五）六月七日の京都での総会の席上、羽田明名誉会長から、会員紹介的な記事が欲しい旨の発言があった。本学会は多岐多様の分野の会員の集合体であるので、会員相互がまだよく知り合っていないからである。そこで、昨年四月に会員自己紹介のアンケートをつのって作ったのが、この欄である。

記事事項の多くは、一九八六年春頃のアンケートによる回答内容であるが、今年二月二十日付の総会通知状の中に「会員自己紹介の訂正、追加を申し出られた会員も多く、従って、今年（一九八七）三月現在の内容と見ることができよう。

- 凡例 ①生年月日 ②現職 ③学歴 学位 ④フランスとの関係（関係地名機関名） ⑤専攻分野 ⑥現在のテーマ ⑦主な業績（最近五ヶ年、三点以内） ⑧現住所 ⑨その他
(ABC順)

赤松明彦 AKAMATSU, Akihiko

②京大大学人文科学研究所（東分部）助手

③京大大学院文学研究科博士課程修了（一九八一年三月）パリ第三大学第三期博士課程修了 Doctorat de 3e cycle (études indiennes)

④一九八一年一〇月から八三年六月まで留学 パリ第三大学 ⑤インド思想史 ⑥Vakyapadiya 研究 ⑦Evolution de la theorie de l'Apoha [L'Apohaprakaraṇa de Jñānaśrīmitra] (学位請求論文、一九八三年) 古典インドにおけるコトバ論の展開 (『人文学報』六〇、一九八六年)

蘆田孝昭 ASHIDA, Takaaki

②早稲田大学文学部教授 ③東京大学大学院

中国文学 ④一九八四年と八五年九月 パリ国立図書館、中国学院、パリ大学に滞在 ⑤中国語文学 文体論 比較文学 ⑥中国俗話小説 東洋の近代文学意識 ⑦嶺外雜記——麻沙鎮 (『中国文学研究』早大中国文学会 平話之種裏的章回型式(華文) (『香港中国語文学会王力教授頌寿記念論文集』林三中)

BERQUE, Augustin オーギュスタン・ベルク

②日仏会館フランス学長 ⑤人文地理学

笹 沙 雅 章 CHIKUSA, Masaki

② 京都大学文学部教授 ③ 京大大学院文学研究科修士課程修了 文学博士(京都大学) ④ 東洋史 ⑤ 中国宗教社会史 ⑥ 中国仏教社会史研究(同朋舎、昭和五七年) 宋元時代の慈恩宗(『南部仏教』五〇、昭和五八年) 宋元時代の杭州寺院と慈恩宗(『中国近世の都市と文化』昭和五九年)

DURT, Hubert ユベール・デュルテ

② EFEO (極東学院) 研究員、『法宝義林』編集主任 ③ PHILOGIE et HISTOIRE ORIENTALES, UNIVERSITÉ de LOUVAIN, Doctorat ④ 仏教学 ⑤ 漢訳経典(古代仏教史・戒律・仏教美術史) ⑥ 『法宝義林』第六卷『CAHIERS D'EXTRÊME-ASIE』ラモット大智度論』索引のそれぞれに参加

榎 一 雄 ENOKI, Kazuo

② 財団法人東洋文庫理事 ③ 東京帝國大学文学部卒 文学博士 ④ 一九五二年一月 数回講演 ギメ美術館

その他 ⑤ 中央アジア史 東西交渉史 ⑥ 二〇世紀の中央アジア 新疆の建省『ヨーロッパとアジア』明末のマカオ

藤 枝 晃 FUJIEDA, Akira

② 京都大学名誉教授 ③ 昭和九年京大文学部卒(東洋史) 文学博士(旧制) Ph. D. h. e. (コペンハーゲン大学) ④ 一九七七年一月から一二月まで講義 中国高等研究所(他に六四年以来、滞在七回) ⑤ 東洋史 ⑥ 敦煌・トルファン研究 ⑦ 「徳化李氏凡将閣珍藏」印について(『京都博物館學叢』七、一九八六年) The Earliest Types of Chinese Buddhist Manuscripts Excavated in Turtan, Csoma de Körös Bicentenary Symposium, 1984 『敦煌學導論』(天津、南開大學、一九八一年、中文)

福 井 文 雅 FUKUI, Fumimasa

② 早稲田大学文学部教授 ③ 早大・文研博士課程(東洋哲学)満期退学 昭和三四(一九五九)年アテネ・フランス Athénée français 卒 文学博士(早大) ④ 一九六一年九月から六四年八月までフランス政府留学生 フランス国立高等研究院宗教学科、その他国際会議で三回渡仏 ⑤ 中国宗教史 ⑥ 漢訳仏典 道教の呼吸法 宗教儀礼 ⑦ 欧米における道教研究(平河出版社『道教』三、

一九八三年) 大乘仏教と中国思想(春秋社『講座大乘仏教』一〇、一九八五年)『般若心経の歴史的研究』(春秋社、一九八七年)

福島 仁 FUKUSHIMA, Hitoshi

②名古屋大学文学部助手 ③東大人文学部研究所博士課程修了 文学修士 ④一九八五年七月から八月まで旅行

⑤中国哲学・中西思想交流史 ⑥天主教と明清思想との影響関係 ⑦朱子心性論の成立過程(『日本中国学会報』三三) 朝鮮前期の朱子学における格物論(『朝鮮学報』一〇七)『新編天主人録』とその改訂に関する資料の諸問題(名古屋大学文学部研究論集 第九九集)

濱田 正美 HAMADA, Masami

②法政大学経済学部教授 ③京都大学大学院
中退 ④一九七三年九月から七五年六月まで留学 パリ第三大学、EHEP ⑤中央アジア史 ⑥チャガタイ語歴史文献の研究 ⑦L'histoire de Hotan de Muhammad A'lam, Zinbun, 15, 16, 18 一九世紀ウイグル歴史文献序説(『東方学報』五五)

羽田 明 HANEDA, Akira

②(武田)杏雨書屋館長 ③文学博士 ④一九三六年九月から三八年九月まで留学 六四年から六六年までパリ大学都市日本館館長 七一年講義、七三年講演 コレージュ・ド・フランス ⑤中央アジア史 トルコ民族史(東西交渉史) ⑥東西医学の交流 ⑦中央アジア史研究(臨川書店)異域録(編訳、平凡社『東洋文庫』、一九八五年)

羽田 正 HANEDA, Masashi

②橘女子大学助教授 ③京大・文修、京大・文・博士課程単位取得退学 パリ第三大学第三期博士課程修了、Docteur de 3e cycle ④一九八〇年一月から八三年七月まで留学 パリ第三大学、フランス国立高等研究院第四部門 ⑤西南アジア史 ⑥一四世紀以後の東方イスラム世界史 ⑦Le système militaire safavide. Le chah et les Qizilbas. (学位請求論文、パリ、一九八三年)後期イスラム国家の支配——サファヴィー朝の場合——(筑摩書房『講座イスラム』二、一九八五年)

原 實 HARA, Minoru

②東京大学文学部教授 ③昭和二八年東大文学部卒 文学博士 ④一九七九年七月 旅行 ⑤サンسكريット文学

⑥サンسكريット文学

大東出版社、昭和五九年)

平井 宥 慶 HIRAI, Yūkei

②大正大学講師 ④昭和五四年十月敦煌
学国際会議(パリ) ⑤中国仏教(敦煌資料研究)学 ⑥中国密教の
実像 ⑦敦煌本密教疑經典考(『密教文化』一五〇) シルクロードと
しての朝鮮半島(『東西交渉』四一四) 「金剛般若経」、「千手千眼陀
羅尼経」(『講座敦煌』7)

堀 池 信 夫 HORIKI, Nobuo

②筑波大学助教授 ③東京教育大学文学部博
士課程 文学修士 ⑤中国哲学 ⑥漢魏思想史 ⑦マルブランシュと
中国(『筑波中国文化論叢』五) マルブランシュの晩年の思想——「キ
リスト教哲学者と中国の哲学者との対話」をめぐって——(『筑波中
国文化論叢』六)

平 川 彰 HIRAKAWA, Akira

②東京大学名誉教授 日本印度学仏教学会理
事長 ③東大文学部卒 文学博士 ④一九四〇年一月滞在、ユネスコ
本部 ⑤仏教学 ⑦『八宗綱要』上下(『仏典講座』三九、大蔵出版)
『講座・大乘仏教』(共編著、春秋社) その他

池 田 温 IKEDA, On

②東京大学東洋文化研究所教授 ③東大
学院満期退学 文学修士 ④一九六九年一〇月・七八年一月、滞在
(パリ日本館) ⑤中国史 ⑥吐魯番・敦煌文書研究、東アジア前近
代の文化交流 ⑦〈唐令拾遺補〉編纂をめぐって(『律令制——中国
朝鮮の法と国家〉) 中国古代買田、買園券の一考察(『東アジア史にお
ける国家と農民』) 中国古代契約文書の整理(『中国朝鮮文書史料研
究』)

廣 川 堯 敏 HIROKAWA, Takatoshi

②大正大学講師 ③大正大学大学院博士課
程 ④一九七六年五月から七八年一月まで留学 フランス国立高等研
究院 ⑤仏教学 ⑥敦煌文献の研究 ⑦礼讃(『敦煌と中国仏教』7

今 枝 二 郎 IMAEDA, Jirō

②大正大学教授 ③大正大学大学院博士課程

④スワミエ先生滞日中、先生と吉岡先生・石井昌子先生との四人で研究 ⑤唐代道教 ⑥玄宗皇帝研究 ⑦弘法大師における中国思想(『川崎大師仏教文化論集』4) 道教經典に現れた讖緯思想について(『国書刊行会『讖緯思想の総合的研究』) 唐代における老子注について(『国書刊行会『中国思想・宗教論集』)

石井 米雄 ISHII, Yoneo

博士 ④旅行 その他 M. Robert Lingat との個人的交渉 ⑤東南アジア史 ⑥上座部仏教と王権思想 ②京都大学教授 ③東京外語大中退 法学

石澤 良昭 ISHIZAWA, Yoshiaki

②上智大学外国語学部教授、上智大学アジア文化研究所所長 ③文学博士 ④一九七四年一月から七六年九月まで留学 フランス国立高等研究院、第四部門 ⑤カンボジア碑刻文学 ⑥東南アジアの文化遺産の保存修復研究 ⑦『東南アジア現代史Ⅲ』(共著、山川出版) 『埋もれた文明アンコール遺跡』(日本テレビ出版部、一九八一年) 『古代カンボジア史研究』(国書刊行会、一九八二年)

石塚 晴道 ISHIZUKA, Harumichi

②北海道大学文学部助教 ③昭和四〇年東大文学部卒 昭和四二年東大大学院修士課程修了 文学修士 ④一九六九年七月、滞在 パリ国立図書館 ⑤国語学 古文献学 ⑥日本書紀古訓の研究 漢文の各国訓みの研究 ⑦『圖書寮本日本書紀』本文篇・索引篇・研究篇(汲古書院)、岩崎文庫貴重書誌解題稿一・二(東洋文庫)

岩田 孝 IWATA, Takashi

②早稲田大学文学部専任講師 ③早稲田大学文学研究科(博士課程)満期退学 Ph. D. (ハンプルク大) ⑤仏教論理学 ⑥仏教論理学における認識と論理 ⑦仏教論理学派の現量除分別性の証明における時間要素(『日本仏教学会』四九) 同時認識について(『東洋の思想と宗教』一)、法称の「Samivedana」による有形相説論証」とその展開(『平川博士古稀記念論集』)

彌永 信美 IYANAGA, Nobumi

②文筆業 ③フランス国立高等研究院EP HE 第四部門中退 ④一九六四年九月から六九年六月まで留学 ナンシー(高校)そしてパリ(A.P.H.E. IV^osection) ⑤仏教学 ⑥ヨ一

ロッパ精神史における「東洋」の意味 ⑦『幻想の東洋——オリエンタリズムの系譜』(青土社、一九八六年)

井筒俊彦 IZUTSU, Toshiko

②慶応大学名誉教授 ③慶応大学文学部卒

文学博士 ⑤東洋哲学 ⑥東洋哲学の共時論的構造化 ⑦『意識と本質』(岩波書店)『意味の深みへ』(岩波書店、一九六〇年) ⑧神奈川

上村勝彦 KAMIMURA, Katsuhiko

②東京大学東洋文化研究所助教授 ③昭和四

二年東大文学部仏語仏文学卒、昭和四五年東大大学院印度哲学専門課程修了 文学修士 ⑤インド学 ⑥インド古典詩論 ⑦『インドの詩人』(春秋社、昭和五七年)『カウティリヤ実利論』(岩波文庫、昭和五九年) Bhatia Lollata の rasa 論(『印仏研』三四— 昭和六〇

金岡照光 KANAOKA, Shōkō

②東洋大学文学部教授 ③東京大学文学部卒

文学博士 ④一九八四年一〇月から一月まで講演(フランス外務省招聘教授) フランス国立高等研究院、アジア研究所 ⑤中国文学語

学 ⑥敦煌写本による中国中世宗教文学研究 ⑦『仏教漢文の読み方』(春秋社)『漢訳仏典』(学研)『敦煌の絵物語』(東方書店)

神田信夫 KANDA, Nobuo

②明治大学文学部教授 ③一九四三年東京

帝国大学文学部東洋史学科卒 ④一九六三年一月から六四年二月まで滞在(パリ国立図書館) ⑤東洋史 ⑥清朝興起史 ⑦鑲紅旗檔、乾隆朝1(東洋文庫、一九八三年) 清初の漢軍武将石廷柱について(『駿台史学』六六、一九八六年二月)

狩野直禎 KANO, Naosada

②京都女子大学教授 ③京都大学文学部史

学科東洋史専攻 ④一九七七年四月から七八年三月まで留学 コレージュ・ド・フランス ⑤中国古代中世史 ⑥後漢政治史 ⑦『史記人間学を読む』(学陽書房、一九八四年)『三国史の智慧』(講談社現代新書、一九八五年) 諸葛孔明—政治家として(『懷徳』五三、一九八四年)

加藤周一 KATO, Shūichi

②文筆業 ③MD(東大) ④一九五一年

一〇月から五四年一二月まで留学（その後、講演）パリ、リヨン等
⑤日本思想史 日本文化史 ⑥日本文化史序説 ⑦『日本文学史序説』

川口久雄 KAWAGUCHI, Hisao

②金沢大学名誉教授、大東文化大学講師

③東京文理科大学卒 文学博士 ④一九六二年三月から一二月まで留
学 フランス国文図書館、ギメ美術館 ⑤敦煌資料 ⑥敦煌資料と日
本文学 ⑦『敦煌資料と日本文学』（I・II・III・IV、巖松堂）『幕末
明治海外体験詩集』（勉誠社）『古典の変容と新生』（明治書院）

川合康三 KAWAI, Kōzō

②東北大学文学部助教授 ③京大大学院 ⑤
中国文学 ⑥中唐文学 ⑦韓愈の「古」への志向（『集刊東洋学』五
一、一九八四年四月）戯れの文学——韓愈の「戯」をめぐる——
（『日本中国学会報』三七、一九八五年）長安に出てきた白居易（『集
刊東洋学』五四、一九八五年十二月）

岸本良彦 KISHIMOTO, Yoshitiko

②明治薬科大学助教授 ③早稲田大学文学

部及び文学研究科卒 ④一九七五年一〇月から七七年六月までフラン
ス政府留学生 パリ第七大学、フランス国立高等研究院 ⑤中国古代
思想史 ⑥呂氏春秋の研究 ⑦「中国上代における養生説の思想的
考察」「五徳説と鄒衍に関する一考察」「呂氏春秋十二紀偽作説とその
批評」

小林正美 KOBAYASHI, Masayoshi

②早稲田大学文学部助教授 ③早稲田大学
大学院文学研究科東洋哲学博士課程退学 文学修士 ④一九八〇年九
月から一〇月まで共同研究 パリ、道蔵研究会 ⑤六朝の三教交渉史
⑥劉宋の天師道の研究 ⑦劉宋における靈宝経の形成（『東洋文化』六
六二、昭和五七年）靈宝赤書五篇真文の思想と成立（『東方宗教』六
〇、昭和五七年）大道家令戒の成立について（『東洋の思想と宗教』六
二、昭和六〇年）

興膳宏 KOZEN, Hiroshi

②京都大学文学部教授 ③京大大学院文
学研究科博士課程 ④一九八二年四月から八三年一月まで滞在 フラ
ンス国立高等研究院 ⑤中国文学 ⑥中国中世文学理論 ⑦文心雕龍
と出三蔵記集（『中国中世の宗教と文化』）『庚信』（『中国の詩人』四、

集英社) 古今集真名序覚書(『文学』、一九八五年二月)

熊沢精次 KUMAZA, Seiji

学研究科修士 ④一九八三年九月から八四年九月まで日本語教授・パリ第七大学 ⑤日本語教育 ⑥フランスにおける日本語教育史

楠山春樹 KUSUYAMA, Haruki

②早稲田大学教授 ③一九四三年九月早稲田大学文学部東洋哲学専修卒、文学博士 ④一九六五年一月から一月まで滞在 パリ ⑤中国思想 道教 ⑥道家を中心とする中国思想 ⑦『老子』(小学館『中国の人と思想』、一九八四年) 逍遙遊篇小考(『東洋の思想と宗教』二、一九八五年六月) 訳注『淮南子』中巻(『新釈漢文大系』明治書院、一九八二年)

京戸慈光 KYŌDO, Jikō

②コレージュ・ド・フランス東洋学術院日
本学高等研究所所員 ③フランス国立高等研究院修了 ④一九七五年

六月から八六年三月まで勤務(②の研究所) ⑤仏教学 ⑥中国仏教疑偽經典の研究 ⑦“A STUDY OF THE BUDDHIST MANU-SCRIPTS OF DUN-HUANG: CLASSIFICATION AND METH-ODE” 円仁、『宗派別・日本の仏教・人と教え1・天台宗』(小学館)

前田繁樹 MAYEDA, Shigeki

②早稲田大学大学院文学研究科東洋哲学専攻博士課程 早大文学部副手 ③文学修士 ④中国宗教史 ⑤六朝道教 ⑦六朝時代に於ける千古博の變遷(『東方宗教』六五、昭和六〇年)「老君説一百八十戒序」の成立について(『東洋の思想と宗教』二、昭和六〇年)

三崎良周 MISAKI, Ryōshū

②早稲田大学教授 ③早稲田大学文学部東洋哲学科卒業、同大学院(旧制)修了 文学博士(早大) ④一九七二年十日間、旅行 ⑤密教学・密教史 ⑥五大院安然の密教思想 ⑦五大院安然の曼荼羅思想——特に金剛界について——(『平川博士記念論文集』東密における蘇悉地——特にその伝承説について——(『天台学报』二七、——特にその印信について——(『東洋の思想と宗教』

三) 五大院安然と本覚讚 (浅井編『本覚思想の研究』)

宮川尚志 MIYAKAWA, Hisayuki

② 東海大学教授 ③ 京大卒 ⑤ 東洋史

宮沢正順 MIYAZAWA, Shojun

② 大正大学文学部専任講師 ③ 大正大学大学院修士課程終了 文学修士 ⑤ 日中宗教文化 ⑥ 道教の人間論 曾槌の研究——『道枢』を中心として—— ⑦ 「道教文学序説」(『牧尾博士頌寿記念論集 中国の宗教・思想と科学』「道枢の一考察」(『東方宗教』第六三号)「道教の寿命論」(『那須博士米寿記念仏教思想論集』)

森安孝夫 MORIYASU, Takao

② 大阪大学文学部助教授 ③ 東京大学文学部卒、東大大学院博士課程単位取得退学 文学修士 ④ 一九七八年一月から八〇年七月まで留学 パリ、国立図書館、ギメ美術館、フランス国立高等研究院 ⑤ 中央アジア史 ⑥ ウィグル文書・碑文の歴史的研究「善悪因果経」(モンゴル文・漢文・チベット文・ソグド文)の比較研究 ⑦ 吐蕃の中央アジア進出 (『金沢大学文学部論集 史学

科篇』四、一九八四年) ウィグル語文献 (『講座敦煌』6、一九八五年) チベット文字で書かれたウィグル文仏教教理問答 (P. t. 1292) の研究 (『大阪大学文学部紀要』二五、一九八五年)

明神 洋 MYOJIN, Hiroshi

② 早稲田大学大学院文学研究科東洋哲学専攻博士課程 ③ 文学修士 ④ 一九八五年一月、パリ・コロックにオブザーバーとして参加 ⑤ 六朝宗教史 ⑤ 五—六世紀の中国仏教 ⑦ 中国仏教徒の焼身と道教 (『文学研究科紀要別冊』一一)、『スタン』『益裁の宇宙誌』(共訳、せりか書房)

中村 元 NAKAMURA, Hajime

② 東方学院院長 ④ 数回旅行 ⑤ Indian and Comparative Philosophy ⑦ A History of Early Vedānta Philosophy vol. I, Published by Motilal Banarsidass

中村 璋 八 NAKAMURA, Shohachi

② 駒沢大学教授 ③ 東京文理大卒 文学博士 ⑤ 中国思想史 ⑥ 中国の民族思想の研究 (『讖緯思想・陰陽五行説等』)

⑦『重修緯書集成』、『五行大義』校註及び全訳、『日本陰陽道書の研究』

成瀬 隆 純 NARUSE, Takazumi

②早稲田大学文学部講師 ③早稲田大学大

学院文学研究科 ④一九六九年八月一週間、旅行 ⑤仏教学 ⑥中国浄土教 ⑦中国浄土教と自撲懺悔、弘法寺釈迦才考、中国浄土教に於ける菩薩観

小河 織 衣 OGŌ, Ori

②文京女子短期大学英文科教授(フランス

語、哲学) ③早稲田大学大学院フランス文学研究科博士課程 文学修士 ④一九七〇年七月から十一月まで フランス政府招聘 パリ大学 ⑤フランス文学 哲学 比較思想 比較文学 ⑥ガブリエル・マルセル研究 明治期におけるカトリック思想の移入 ⑦シモーヌ・ヴェイユ研究(『文京女子短期大学英語英文学科学研究紀要』、一九八三・八四・八五年)

大地原 豊 OJIHARA, Yutaka

②京都大学名誉教授 ③京都帝国大学文学

部卒業 ④一九五二年八月から五三年八月まで留学、その後、滞在講演計六回 パリ、Institut de civilisation indienne ⑤インド(古典)文献学 ⑥Dharma-samuccaya, ed. Lin, reconsidérée ⑦Le Madanasanjivana, bhāṇa de Ghanas̥yāma: édition revue et corrigée (à paraître in: Bulletin des études indiennes, III)

岡 山 隆 OKAYAMA, Takashi

②早稲田大学政治経済学部教授 ③早稲田

大学政治経済学部、旧制大学院 ④一九五〇年八月から五四年一月までフランス政府留学生 旅行、滞在、講演(一九六九年一〇月から七一年一月、八三年五月から一〇月 アンジェ大、パリ大学 Science Po) ⑤経済学(国際経済学) ⑥先進国間の経済相互依存性 ⑦語りたい、伝えたい夢(東京都一九八五年国際青年) 早稲田大学人文科学研究科のこと(早大社会科学研究所)

小 名 康 之 ONA, Yasuyuki

②青山学院大学文学部助教授 ③東大大学

院 修士 ④一九八五年と七八年、資料調査 旅行 フランス国立図書館、フランス史料館 ⑤一七世紀インド史 ⑥一七世紀後半のイン

ドとフランス ⑦フランスソワールロギーの手紙をめぐって——フランス東インド会社とムガル——(『青山史学』八、一九八四年)

坂出 祥伸 SAKADE, Yoshinobu

②関西大学文学部教授 ③京大大学院文学研究科修士課程了(中国哲学) 文学博士 ④一九八五年九月から一〇月まで滞在 日仏学術シンポジウム ⑤中国哲学 ⑥中国古代養生思想 ⑦『中国近代の思想と科学』(同朋舎・一九八三年)『康有为』(集英社、一九八五年) 風の観念と風占い(新田大作編、『中国思想研究論集』、一九八六年雄山閣)

酒井 忠夫 SAKAI, Tadao

②筑波大学名誉教授 ③東京文理大卒(一九三五年) 文学博士 ④一九七五年三月 旅行、講演 コレージュ・ド・フランス シナ高等研究所 ⑤中国史(特に道教及び習会) ⑥三教合一と道教、習会 ⑦中国史上の道教と迷信批判(『牧尾良海博士頌寿記念論集』、昭和五九年) 近現代中国における善書と新生活運動(『宗教社会史研究』II、昭和六〇年)

里 道德雄 SATOMICHI, Norio

②東洋大学助教授 ③東洋大学大学院博士課程修了 文学修士 ⑤中国仏教史

澤(旧姓) 太田) 美香 SAWA, Mika

②早稲田大学大学院文学研究科東洋史専攻博士課程 ③文学修士 ⑤一七世紀・一八世紀におけるヨーロッパと中国の交流 ⑥皇輿全覽図の研究 ⑦「皇輿全覽図」について——チベット図作成をめぐって——(『文学研究科紀要別冊』一一 一九八四年早稲田大学大学院文学研究科) 「皇輿全覽図」についての新史料——『宮中檔康熙朝奏摺』収録の地図関係奏摺——(『史観』一一三、一九八五年九月)

滋賀 秀三 SHIGA, Shūzō

②千葉大学法経学部教授 ③東京帝国大学法学部卒業 法学博士 ④一九六八年四月から八月まで滞在 (パリ国立図書館で仕事)、各地旅行 ⑤中国法制史 ⑥概論的考察 ⑦『清代中国の法と裁判』(創文社、一九八四年)

白土わか SHIRATO, Waka

②大谷大学講師(非常勤) ③東京女子高等師範学校文科卒、大谷大学仏教学科卒 ④一九六五年一〇月から六七年一〇月まで留学、一九八二年五月から九月、講演 フランス国立高等研究院、コレージュ・ド・フランス ⑤仏教学 ⑥日本天台の思想史的研究 ⑦良忍上人と曼殊院本『出家作法』(『良忍上人の研究』昭和五六年) 最澄における時と機認識について(『日本仏教学会年報』四九) 日本天台における論義の系譜——序説(『大谷大学研究年報』三六)

菅原信海 SUGAHARA, Shinkai

②早稲田大学文学部教授 ③早稲田大学文学部東洋哲学専修卒 ④一九七七年四月から八月まで旅行 ⑤日本思想史 ⑥天台神道の研究 ⑦『山家最略記』について(『早稲田大学文研紀要』二九)『耀天記』の成立(『東洋の思想と宗教』一)『神道大系』日光・二荒山

高橋 稔 TAKAHASHI, Minoru

②東京学芸大学教授 ③東京大学大学院博士課程 文学修士 ④一九八二年五月から八三年一月まで、文部省在

外研究員 パリ国立図書館他 ⑤中国文学 ⑥中国古代の説話文学の研究

⑦眉間尺故事(東大出版『中国の古典文学』一九八一年)『六朝唐小説集』(共著、学習研究社『中国の古典』三二、一九八二年) 中国における説話文学の諸相(至文堂『国文学 解釈と鑑賞』一九八四年九月)

高崎直道 TAKASAKI, Jikido

②東京大学教授 ③一九五〇年東大文学部(インド哲学)卒 文学博士、Ph. D. ④印度哲学とくにインド仏教⑤瑜伽行派文献(唯識と如来蔵思想の交渉) 研究 ⑥Kūbō Daishi and Tathāgatagarbha Theory. ACTA ASIATICA 47, 1958「諸法無我」考(中村瑞隆博士古稀記念『仏教学論集』一九八五年春秋社) アーラヤ識と縁起——執受 upādāna との関連——(平川博士古稀記念論集『仏教思想の諸問題』一九八五年、春秋社)

田中文雄 TANAKA, Fumio

②愛国学園短期大学講師 ③大正大学大学院博士課程単位取得修了 文学修士 ④一九八五年九月から一〇月まで、パリのコロックにオブザーバー兼討論者として参加 ⑤中国哲学 ⑥中国における三教交渉 ⑦六朝知識人の五戒理解の一側面

『豊山教学大会紀要』、昭和五七年） 太平経の還神法について（牧尾先生記念論文集『中国の宗教・思想と科学』、昭和五九年）「五輪九学秘釈」の背景思想に関する一管見——道教・医学の両側面について（『豊山教学大会紀要』、昭和五九年）

田中 於菟彌 TANAKA, Otoyā

③東京大学文学部梵文学科卒 ④昭和四八年学会参加 ⑤サンスクリット文学、インド文化史 ⑥「クッタニー・マタ」の翻訳と研究 ⑦『インドの神話』（筑摩書房『世界の神話』六、一九八二年）『遊女の手引き』（平河出版社、一九八五年）

渡会 顕 WATARAI, Akira

②大正大学総合仏教研究所研究員 ③大正大学大学院博士課程単位取得中退 文学修士 ④中国思想・宗教 ⑤漢代思想・宗教 ⑦「漢代儒教国教化に関する二、三の考察」「漢武帝による太一神祭祀の一考察」「中国における生命観の一側面」

八木 徹 YAGI, Toru

②大阪学院短期大学講師 ③京都大学卒

Doctorat de 3e cycle ④一九七七年一月から一九八〇年三月まで留学 パリ第三大学 ⑤インド学 ⑥Siddhavadhāva (Pan-su, 6, 4, 22-57 ⑦“Le Mahābhāṣya ad Pāṇini 6, 4, 1-19”, Paris, 1984

山田 利明 YAMADA, Toshiaki

②東洋大学専任講師 ③大正大学大学院博士課程 文学修士 ④一九八五年九月から一〇月まで、パリのコロックに参加 ⑤中国哲学 ⑥六朝道教経典成立史 ⑦靈宝五符の成立とその符瑞的性格（『識緯思想の総合的研究』） 道藏十二類成立に関する一資料の背景（『牧尾先生記念論文集』）

山口 瑞鳳 YAMAGUCHI, Zuhō

②名古屋大学教授 ③東京大学文学部梵文学博士 ④一九五七年一月から六四年九月まで留学 パリ、CNRSとEPHE（フランス国立高等研究院） ⑤チベット学 ⑥チベット史（古代・敦煌・ダライ・ラマ政権成立史） チベット語歴史文法 チベット仏教教理（ゲルク派）学 ⑦『吐蕃王国成立史研究』「チベット語文献」（『敦煌胡語文献』講座敦煌6） チベット語文典の不備（『東大文学部文化交流研究施設紀要』六、七）

山中 一郎 YAMANAKA, Ichirō

② 京都大学文学部助教 ③ 一九七六年京大
大学院文学研究科博士課程退学 ④ 一九七〇年七月から七三年八
月まで留学 パリI大学、プロヴァンス大学理学部 ⑤ 先史学 ⑥ 石
器型式学の研究 ⑦ ペンスヴァン (『文化財学報』三、一九八四年)
中国の旧石器時代文化研究のために (『旧石器考古学』、一九八五年)

編集後記

○ 『通信』の発刊がまるまる一年分もおくれてしまいましたのは、
ひとえに事務局側の事情によるもので、深くお詫びしなければなりま
せん。実は、川崎は昨年四月に東洋大学の専任講師に就任以来、自由
な時間が極度に少なくなり、弥永は自著『幻想の東洋』の執筆・校正
に追われ、福井もやはり文部省助成金による期限つきの仕事に追われ、
その間また海外出張もあつたりして、要するに、事務局三人がこの
『通信』の編集に当れる時間が、昨年度中は皆無に近かったのです。
この三人以外に事務局員はいませんので、三人とも気にはしながらも、
心ならずもとうとう今日に至ってしまいました。

○ しかしながら、会員の方々にとって必要な事柄は、その都度、短
信や葉書で出来る限りお知らせして来たつもりです。本号は、それら
の通知状をまとめて、改めてここに収録しました。後々の記録、参考

資料にもなるかと思うからです。

○ 事務局が日仏会館から早稲田大学・文学部八階へと移りました。
その理由は本号の中(四ページ)にも詳しく書いてありますが、それ
に伴って、この四月から、つまり、一九八七年度から、事務局スタ
ッフが大部分替りました。詳しくは、これに引きつづいて出す次号
『通信』に報告しますが、本号の発刊は、その新スタッフによる初仕
事です。

○ 「会員自己紹介」その他に誤記や追加記事がありましたら、遠慮
なく御連絡下さい。その他の記事につきましても同様です。宛先は本
号の四ページに出ています。

○ 印刷所も早稲田大学印刷所に替りました。方々の印刷所に当って
検討した結果です。本号の出版について、その寺田印刷部長ほか関係
の方々から格別の御配意を頂きました。厚く御礼申し上げる次第で
す。

(F・F)

昭和六二年(一九八七)度会合のお知らせ

会則によれば、会員総会は年一回で宜しいのですが、種々な理由か
ら昨年度は二回開かれました。この夏にも、総会か評議員会かを予定
しています。その時には、こぞって御参集下さい。